

「記憶」の構築

知覧は「特攻の町」として知られる。特攻平和会館の来館者数は増加の一途をたどり、近年では年間 60 - 70 万に及んでいる。これは、沖縄県平和祈念資料館をはるかに凌駕し、年によっては長崎原爆資料館をも上回る。知覧の交通アクセスの不便さを考えると、その集客には際立つものがある。

しかし、知覧にかつて陸軍特攻基地があったとはいえ、出撃したのは知覧住民ではなく、全国各地から集められた陸軍パイロットである。そもそも、知覧と陸軍基地は当初から親和的だったわけではない。日本有数の茶の産地であった知覧は、基地開設により少なからぬ打撃を受けていた。にもかかわらず、なぜ、そしていつから、「他者の戦争体験」でしかないものが「地域の戦争の記憶」として創られたのか。

今日の眼からすれば意外に思える「戦争の記憶」のありようは、決してこれにとどまるものではない。戦後初期の広島では、8月6日（およびその前後）に平和祭と称した「お祭り騒ぎ」が見られた。世界文化遺産に登録されている原爆ドームについても、撤去論は根強かった。建築家の丹下健三は、原爆ドーム - 原爆慰霊碑 - 原爆資料館を貫く直線を平和記念公園構想の基軸に据えたが、その具体化を検討する広島市平和記念都市建設専門委員会では、原爆ドーム存置への批判的な意見が相次いでいた。では、なぜ、当初は原爆被災日に祝祭が求められ、被爆遺構の撤去が叫ばれたのか。それが、いかにして真正さを帯びるようになったのか。

戦争体験や戦争の記憶に関する言説史（新聞・地方誌・広報誌・公文書・映画（評）等々）を眺めてみると、一見、理解しがたく思えるものも少なくない。だが、それは言い換えれば、戦後の社会変容のなかで、何が削ぎ落とされ、忘却されてきたのかという問いを想起させる。

「書かれたもの」の系譜と位相差

社会学において、「戦争」が主たるテーマであったどうかはさておき、その蓄積は少なくない。特攻隊員や戦没学徒の思惟様式に迫った森岡清美『決死の世代と遺書』（1991年）・『若き特攻隊員と太平洋戦争』（1995年）、被爆者への聞き取りを通して、当事者の情念や思考を析出した石田忠『反原爆——長崎被爆者の生活史』（1973年）、戦記ものや戦友会の調査分析を進めた高橋三郎『「戦記もの」を読む』（1988年）・『共同研究戦友会』（編著・1983年）などは、先駆的なものである。

その後の研究動向を見渡してみても、ライフストーリー研究やオーラルヒストリーの分野では、文化人類学や宗教社会学とも重なりながら、研究の蓄積が進んでいる。だが、総じて、「書かれたもの」の系譜や位相差を扱う作業は、あまり進んでいないように思われる。

体験記や新聞・雑誌言説、あるいは公文書など、戦争（体験）に関する「書かれたもの」は膨大な量にのぼるが、そこに分け入る作業はさほどなされていない。近接領域であれば、メディア史研究において一部扱われているが、時系列的・共時的な整理が実証的に試みられることは少ない。

たしかに、「書かれたもの」は同時代の記憶や心情の一部でしかない。そこに盛り込まれなかったものを掘り起こすべく、聞き取りに基づく研究が進められることには、意義深いものがある。だが、だからと言って「書かれたもの」の系譜や布置を視界の外に置いてもよいわけでもあるまい。同時代において、今日からは思いもよらないような思考がいかによりええたのか。それはいかなる社会的な文脈に規定されているのか。おそらくは、「現在における記憶」として回想したものから零れ落ちるものが、（一定の限界があるにせよ）「書かれたもの」のなかに見出すことも可能なのではないだろうか。さらに言えば、当事者の記憶のなかには、事実誤認や（無意識のうちの）記憶の再構成が混濁しないとも限らない。

過去の膨大な言説に分け入り、それを時系列的・共時的な比較検証は容易ではない。だが、それを抜きに記憶や体験を論じることもしないのではないだろうか。現在の観点から記憶や体験を批評し得ても、通時的・共時的な広い文脈に位置付け直すことには限りがある。さらに言えば、広島なり沖縄なりの言説史のみで見えることにも、じつは限りがある。それぞれの地域（あるいはイシュー）の言説史を横断的に見渡し、それらを突き動かす社会的な力学を比較対照することで見えるものも、少なくはない。

言説史の見取り図を提示することは、「図式化」の批判を招きやすいものではあるだろう。だが、こうした

作業を地道に重ね、批判と修正が重ねられることで、言説の変容過程や位相差が浮き彫りにされる。そこでの見取り図の提示があって初めて、個々の言説や記憶の布置が浮かび上がってくるのではないだろうか。社会学（あるいは歴史学）としての精緻さを追求するのであれば、こうした作業は避けられるべきなのだろうが、それだけでは見えないものもあるように思う。

「正しさ」というフレーム

他方で、(社会学には限らないが)「戦争」が論じられるうえでは、ともすれば、その時々「正しさ」が投影されがちだったように思われる。むしろ、「弱者」に寄り添い、加害責任や植民地主義のポリティクスが析出された意義には大きなものがある。だが、なぜ暴力がそれとして知覚されなかったのか、その社会的な磁場や構造を問うこととは、距離があることも少なくない。「正しさ」を背負っての議論は、ときに、自らが同じ場に置かれたのであれば、同じ過ちを犯したであろう想像力を欠くむきもあったのではないだろうか¹。

だが、言説史を見渡してみると、それとは異なる立論を見ることもできる。学徒兵として南方に出征した経験を持つ神学者・舟喜順一は、知的な煩悶や「殉国の至情」にあふれた戦没学徒の手記類に批判的だった。それは、自らの知性・教養が戦時下に無力であったことの反省とともに、「戦没者自身生前此等の反省を自らの来し方に加えるに至った者もあるのではないか」という思いに根差していた。舟喜にとって、戦争体験に向き合い、死者たちと語り合うことは、戦没者に「感激する」ことではなかった。彼らを批判的に眼差すことこそ、死者に共感することであった（「書評・はるかなる山河に」1948年）。

天皇崇拜や「殉国」の思いを強く抱きながら、レイテ沖で沈んだ戦艦武蔵に乗り組んでいた渡辺清は、その情念の延長で、軍・政府指導者たちの姿勢を問い質した。渡辺自身や死んだ戦友たちの「殉国」の念を思えば、自らの責任を不問に付す上層部の姿勢は、裏切り行為に見えた。のみならず渡辺は、自らを含む一般国民の戦争責任についても多く論じている。自分たちが時代に騙されたとして、それ以上の思考を停止するのではなく、「騙された」ことへの責任を自らに問おうとした。

「継承」のポリティクス

歴史認識をめぐる、「殉国（あるいは顕彰）」と「(加害)責任」の議論が、互いに相容れることなく、不毛な二項対立に陥る状況が長く続いている。戦争に関する書物は、いまでも多く刊行されているが、そのことが両者のコミュニケーションを促すことは少ない。「顕彰」に惹かれる者が「加害責任」を論じた書物を手取ることは稀だろうし、その逆もまた同様であろう。言わば、「戦争」に関する言説があふれるほど、異なる立場の相互理解が進むのではなく、逆に「ディスコミュニケーションの螺旋」とも言うべき状況が生み出されている。しかし、かつてそれとは異なる立論があり得たのも事実である。

戦後七〇年が経過した。「戦争体験の継承」は多く語られ、今後もその切迫感も多く語られよう。だが、「忘却」を思い起こす営みは、どれほど見られるだろうか。継承されようとしているものは、多くの場合、幾多の忘却を経た残滓でしかない。はたして、継承すべきは、その残滓なのか、それとも忘却されてきたものなのか。戦争をめぐる言説の歴史社会学は、今日のわれわれにこうした問いを投げかけている。

¹ 暴力が生起する社会的な構造に関する実証的な研究は、歴史学において少なからず見られる。笠原十九司『南京事件』（1997年）・『日本軍の治安戦』（2010年）は、精緻な史料批判を重ねて南京事件をめぐる史実を析出しながら、日本軍の「暴力」「責任」の指摘に加えて、それを生み出した軍の社会的・組織的な力学を描いている。林博史『沖縄戦——強制された「集団自決」』（2009年）は、現場の地理的な特性、駐留将校の有無、経験に裏打ちされた判断が可能な年長者の存在等々の要因をふまえながら、集団自決の状況の差異やその背景を浮かび上がらせている。その意味で、歴史学の研究のなかには、社会学として汲み取ることが可能なものも少なくないと思われる。見方を変えれば、すぐれた歴史学はすぐれた社会学にもなり得ようし、逆に、すぐれた（歴史）社会学も同時にすぐれた歴史学たり得るのではないか。「戦争」をめぐる社会的な研究の活性化を目指すのであれば、逆説的ながら、社会学に閉じるのではなく、歴史学や思想史、経済学をはじめとした周辺領域を見渡すことが必要なのではないだろうか。